

ロッシェニの歌曲〈黙って嘆こう(Mi lagnerò tacendo)〉

— 同一テキストへの作曲動機とその方法に関する試論 —

水谷 彰良

初出は『ロッシェニアーナ』（日本ロッシェニ協会紀要）第17号（2000年10月発行）の拙稿『ロッシェニの〈Mi lagnerò tacendo〉に関する試論』。書式を変更し、楽譜を追加した新版を『ロッシェニ歌曲研究(1)』としてHPに掲載します。
(2013年6月)

ロッシェニの歌曲作品は、最初期の《粉屋の娘が望むなら》から晩年の作品集《老いの過ち》まで半世紀以上の長期にわたって生み出された。その中にはメタスタジオのテキスト〈黙って嘆こう(Mi lagnerò tacendo)〉¹を使った作品が多数含まれており、歌曲ジャンルにおけるロッシェニのきわだった個性や特色となっている。だが、なぜロッシェニは同一のテキストに繰り返し作曲したのか……その動機と作曲の方法論を、このジャンルの創作第2期の作品を通じて考察してみたい。

〈黙って嘆こう〉のテキスト（メタスタジオの原詞とロッシェニの標準テキスト）

ロッシェニが繰り返し作曲したテキスト〈黙って嘆こう(Mi lagnerò tacendo)〉は、18世紀を代表する詩人・劇作家ピエートロ・メタスタジオ(Pietro Metastasio, 1698-1782)のオペラ台本から採られている。該当作品《シロエ(Siroe)》²は、レオナルド・ヴィンチ(Leonardo Vinci, 1696c-1730)の作曲により1726年2月ヴェネツィアのサン・ジョヴァンニ・グリゾストモ劇場で初演された。同作品はメタスタジオ最初のオリジナル台本となる《捨てられたディドネ(Didone abbandonata)》(1724年)に続く第2作に該当し、当時のオペラ・セーリアの劇様式と約束事に従って書かれている。つまり、この作品ではテキスト上でレチタティーヴォとアリアが完全に分離され、アリアはシェーナの最後に独立したテキストを与えられ、歌手はそれを歌い終わると舞台から去るという前提で作られている(アリアの末尾には常に「去る(Parte)」と付記される)。

〈黙って嘆こう〉の原詞は、この《シロエ》第2幕第1景(scena prima)の末尾に見出せる。1726年の初演から1783年までの58年間に同台本は33人の作曲家によってオペラ化されており、改作も含めると38作の上演を確認できる³。また〈黙って嘆こう〉はオペラ・アリア以外にも歌曲や室内声楽作品に単独の付曲例があり、モーツァルトの三重唱曲(ノットゥルノ) K.437もその一つである。これは1787年もしくは以降に作曲された2ソプラノとバスのための小品で、器楽パート(2クラリネットとバセット・ホルン)は未完成で、テキストにも僅かな異同がある。後にロッシェニが付曲する際にも変更されているので、最初に「メタスタジオのテキスト」「モーツァルトの三重唱曲」「ロッシェニの標準テキスト」の3種を比較対照しておきたい(異同を網かけで示す)。

Metastasio	Mozart, K.437	Rossini (標準テキスト)
Mi lagnerò tacendo del mio destino avaro; ma ch'io non t'ami, o caro, non lo sperar da me.	Mi lagnerò tacendo Della mia sorte avara; Ma ch'io non t'ami, o cara, Non lo sperar da me.	Mi lagnerò tacendo Della mia sorte amara; Ma ch'io non t'ami, o cara, Non lo sperar da me.
Crudele! In che t'offendo se resta a questo petto il misero diletto di sospirar per te?(Parte)	Crudele! in che t'offendo, Se resta a questo petto Il misero diletto Di sospirar per te?	Crudel! in che t'offesi,* Farmi penar così/perché?

* ロッシェニの異稿に「Crudel, perché fin'ora」がある(後述する〈非難〉)

ご覧のように原詞との間に幾つかの異同があるが、これは女性と男性のどちらが主体であるかの違いや単語の置き換えに基づき、第2節についてはロッシェニのそれが2行に縮められている。

次にメタスタジオとロッシェニのテキストの拙訳を掲げよう(次頁。異同は網かけで示す)。同じ詩行で訳詞のニュアンスを変えるのは、《シロエ》第2幕第1景がラオディーチェ(Laodice)とシロエ(Siroe)の対話に始まり、〈黙って嘆こう〉がラオディーチェの歌唱テキストだからである。ラオディーチェは女性役(ペルシアの将

軍の妹との設定) で、初演では女性歌手ルチア・ファッキネッリ (Lucia Facchinelli,?-?) がこれを歌った。

メタスタージオの原詞	ロッシーニの標準テキスト
何も言わずに私は嘆きましょう 欲深き私の運命を。 でも、あなたを愛せずにいられるなんて、愛しき人よ それを私に望まないでください。	黙って嘆こう 苦い私の運命を。 でも、[...] 愛しき人 [女] よ それを私に望まないでください。
つれない方！ どうしてあなたを傷つけられましょう もしもこの胸に残っているなら あなたのためにため息をつくという みじめな喜びが？	つれない人 [女] ! あなたを傷つけたので かくも/何故に 私は苦しみを受けるのか？

モーツァルトとロッシーニのそれが男性用であることは、呼びかける相手が「Caro」から「Cara」と女性形に変えられたことでも判る。これを除けばモーツァルトと原詞との違いは「Del mio destino avaro;」⇒「Della mia sorte avara;」のみとなる。この部分の異同は男性名詞「destino (運命・宿命)」を女性名詞「sorte (運・運命)」に変えたことに起因する。前者がオペラ・セーリアにふさわしい硬い言葉であるのに対し、後者は意味のニュアンスが若干異なり、響きも柔らかく、フラれた男の嘆きの歌としてごく自然である。この変更がモーツァルト自身の発案かどうかは不明だが、前例あつてのことだろう。

その部分はロッシーニのテキストともほぼ一致するが、ロッシーニがモーツァルトの三重唱曲を知っていたとは考えられない。destino ⇒ sorte の置き換えはイタリア人作曲家にとって自然なことであって、筆者がモーツァルト作品を挙げたのもロッシーニへの影響関係を示唆するためではなく、この種の異同に特別な意味があるわけではない、と言わんがためである。この語に続く形容詞 avaro/a はロッシーニによって amaro/a と変えられている。これは「欲深い」という意味が大仰なだけでなく、「アヴァーロ」よりも「アマール」の方が 2 音節目の母音 a の響きが良いためと思われる。

メタスタージオのテキストは当時のアリア形式を考慮して書かれ、一般的なダ・カーポ付きアリアの定型 (A-B-A) では、第 1 節 (A) は反復部で繰り返され、第 2 節は中間部 (B) にのみ充てられる。当然のことながら B の音楽は A と際立った対照をなすので、テキストもこれを考慮して情緒のあり方を変えて書かれる。〈黙って嘆こう〉の場合も第 1 節 (4 行) が感情的に「静」であるのに対し、「Crudele! (つれない人!)」⁴の詠嘆に始まる第 2 節 (4 行) に気持ちが高揚し、再び第 1 節の「静」に戻ることが想定されている。

第 1 節と第 2 節は同じ行数か、第 2 節が第 1 節の半数または 2/3 行となるのが普通で、〈黙って嘆こう〉を含む「シロエ」の第 2 幕では九つのアリアが「4 行+4 行」「4 行+5 行」「6 行+6 行」「4 行+6 行」「4 行+2 行」「4 行+4 行」「4 行+4 行」「4 行+4 行」「5 行+4 行」の構成になっている。前記のようにロッシーニは第 2 節を 2 行に縮め、最終行をコンパクトに書き替えている。これにより、第 1 節の反復を伴う簡潔な歌曲形式 (ABA'もしくはABA+コーダ) に適合させたのである。

ロッシーニの創作第 2 期における〈黙って嘆こう〉

ロッシーニの歌曲や室内声楽曲は、最初の創作からオペラ作曲家時代の終りまでの「第 1 期」(1829 年まで)、引退時代の「第 2 期」(1830 年~1855 年 5 月)、晩年パリ時代の「第 3 期」(1855 年 6 月~1868 年)の三期に区分できる。〈黙って嘆こう〉のテキストによる作品は第 1 期に存在せず⁵、第 2 期と第 3 期すなわちオペラ作曲家引退後のみ作曲されている。本稿では第 2 期の作品のみを分析対象とし、フィリップ・ゴセットによる 2 種のロッシーニ作品目録の記述と分類番号を Gossett(A)と Gossett(B)の二つに区分して示したい⁶。

◎〈非難〉(1834 年)

これまで確認されている最も古いロッシーニの〈黙って嘆こう〉は、歌曲重唱曲集《音楽の夜会 (Les Soirées musicales)》(1835 年)の第 2 曲〈非難 (Il rimprovero)〉[Gossett(B):113/2]である。歌 (ソプラノ) とピアノ、ト長調、3/8 拍子、アンダンティーノ。ワシントンの国会図書館に現存する自筆楽譜には、「室内アリア (Aria di Camera) : ドゥミドフ伯爵のために作曲され G. ロッシーニにより同人へ献呈、1834 年 3 月 26 日」と書かれている [Gossett(A),p.477.]。ロッシーニの標準テキストとの異同は第 2 節に見られ、次のように変えられている

Crudel, perché fin'ora	つれない人 [女] ! どうして今まで
Farmi penar così?	かくも私を苦しめるのか?

《音楽の夜会》に収められた 12 曲は 1830～35 年の間に作曲され、自筆楽譜から書かれた時期を特定できるのはこの〈非難〉のみとなっている。第 1 期の歌曲にはメタスタージオの詩を使った作品が見出せないが、《音楽の夜会》全 12 曲のうち 4 曲 (N.1, 2, 3,10) のテキストはメタスタージオのもので、このアルバムに採用されなかった〈告白 (*La dichiarazione*)〉 [1834 年頃作曲、Gossett(B):112/1] にもメタスタージオの詩が使われている (《音楽の夜会》第 1 曲と同じ〈*Ch'io mai vi possa lasciar d'amare*〉)。〈黙って嘆こう〉は、ロッシーニの最初の妻イザベッラ・コルブランやその師ジローラモ・クレシェンティーニを含む数多くの作曲家によって歌曲テキストに用いられており、ロッシーニは 1830 年以前から知っていたと思われるが、ロッシーニ自身は第 2 期を通じてこれを数多く取り上げている。但し完全な目録化は成されておらず、Gossett(A)の記述は不十分で、Gossett(B)も簡略すぎて情報源としては物足りない。次に、両目録が独立作品として挙げる二つの〈黙って嘆こう〉とそのエディションについて知りうることを述べておこう。

◎ 〈ニツァ〉の原曲 (1836 年頃)

ソプラノとピアノのための〈ニツァ (*Nizza*)〉は 1836 年頃に作曲され、初版は 1837 年頃パリで出版された [Gossett(B):115/1]。ト長調、3/8 拍子、アレグレット。初版楽譜のテキストはフランス語の〈*Nizza, je puis sans peine*〉とイタリア語の〈*Mi lagnerò tacendo*〉が併記され、後のフランス語歌曲から判断してロッシーニは最初に〈黙って嘆こう〉のテキストに付曲、詩人エミール・デシャン (Émile Deschamps, 1791-1871) がこれにフランス語の詩を充てたものと思われる (デシャンはロッシーニの最初のパリ滞在で面識を得ており、1826 年 9 月 15 日にパリのオデオン劇場で初演されたロッシーニ作品によるパステッチョ・オペラ《イヴァノエ *Ivanhoe*》の台本作家でもある)。

この歌曲は 1837 年にリコルディ社がイタリア語のカンツォネッタ〈ニーチェ (*Nice*)〉として出版しており (版刻番号 10098)、筆者の調べでは少し後れてナポリのジラル社が〈ニツァ (*Nizza*)〉の題でやはりイタリア語版を出版している (版刻番号 3373)。ジラル版のテキスト冒頭は〈*Nizza, ben io potrei*〉で、ゴセットはこのテキストをアキッレ・デ・ローズィエルがデシャンのフランス語テキストから伊訳したとする [Gossett(A), p.447.]。なお、〈黙って嘆こう〉のテキストによる〈ニツァ〉の現代譜は 1992 年に日本で 2 種出版されているが、どちらも正当な根拠を欠く欺瞞的エディションである⁷。

◎ 〈別離〉の原曲 (1835 年頃)

ソプラノとピアノのための劇的歌曲 (メロディーア・ドランマーティカ) 〈別離 (*La separazione*)〉は 1857 年頃に作曲され、1858 年にパリのレオン・エスキューディエ社から出版された作品で [Gossett(B):118/1. テキスト冒頭は〈*Muto rimase il labbro*〉]、原曲は 1835 年頃に作曲された〈黙って嘆こう〉とされる [Gossett(A), p.478.]。原譜未出版のため、筆者はそれ以上のことを知り得ない。

一連の〈黙って嘆こう〉 [Gossett(A)(B)の記述より]

Gossett(A)には〈黙って嘆こう〉に関するまとまった記述がある。そこでは重要な〈黙って嘆こう〉が 5 項目で解説されているので、その部分を次に記載しておきたい。[Gossett(A), pp.480-481. 不要と思われる部分を割愛し、楽曲表記も適切なものに改めた]

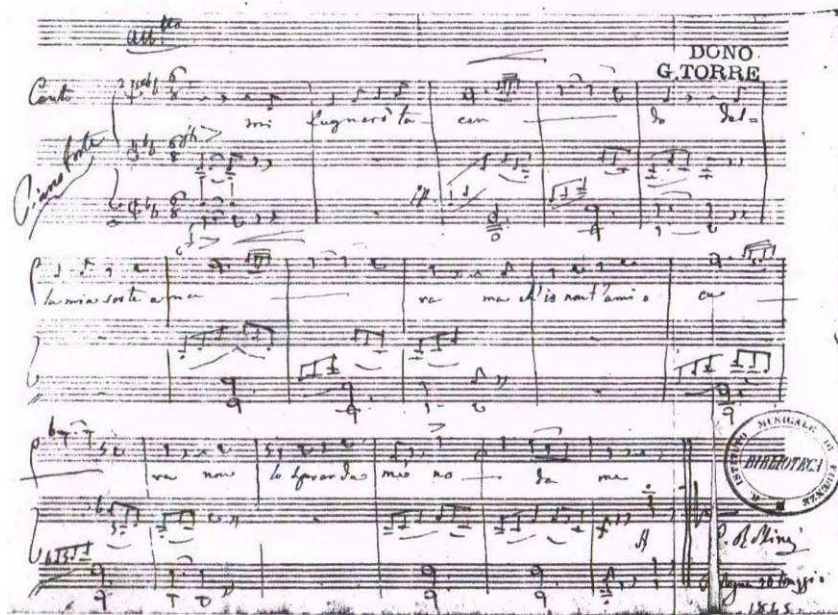
- a) 〈控えめな恋人 (*L'amante discreto*)〉 : 1839 年にミラーノのリコルディ社から「アリエッタ」として出版。少なくとも 12 の自筆異稿が確認されており、この一連の〈黙って嘆こう〉は三つのヴァージョンに区分できる。最も古いものはダンタン氏のアルバムに収められ (パリの国立図書館 Rés.Vm7-537)、1835 年 6 月 17 日の日付を持つ。最も新しいのはパリ音楽院 Ms.383d で、日付は 1856 年 9 月 22 日である。この小品の最初の自筆楽譜はルイーザ・カルリエ嬢のアルバムに含まれる 1835 年 3 月 4 日付のものである。
- b) 〈ボレロ (*Bolero*)〉 : このタイトルによる曲は、最初にフィレンツェのグイーディ社の『フィレンツェ音楽新聞 (ガッツェッタ・ムジカーレ・ディ・フィレンツェ)』1853 年第 5 号に掲載された。この一連の〈黙って嘆こう〉は、少なくとも六つの自筆楽譜が知られている。時代的に最初のもの (パリ音楽院 Ms.2442-2) はヒトロフ夫人 (?) に献呈され、1836 年 3 月 22 日の日付を持つ。
- c) 〈恨みごと (*Il risentimento*)〉 : 1847 年頃にナポリのジラル社からこのタイトルで出版。少なくとも 4 種の印刷楽譜が存在するが、奇妙なことに自筆楽譜は一つとして確認されない。他の一連の〈黙って嘆こ

う) よりもかなり長く複雑な楽曲であり、他の自筆アルバムとは独立して作曲されたものであろう。

- d) 〈黙って嘆こう (*Mi lagnerò tacendo*)〉 : 一度も出版されたことのないヴァージョンであるが、五つ知られる自筆楽譜のうち一つのファクシミリが、『ジョアキーノ・ロッシーニへのフィレンツェ人たちの尊敬 (*Onoranze Fiorentine a Gioachino Rossini*)』(1902年フィレンツェ刊)に掲載されている【楽譜1】。このヴァージョンの原譜はすべて1844年から46年の間に集中している。この曲は《エルミオーネ》で使われた旋律に基づいており、すでに〈スペインのカンツォネッタ〉(1821年)でも使われている。
- e) 〈黙って嘆こう (*Mi lagnerò tacendo*)〉 : ロンドンのジョゼフ・ウィリアムス社が1959年に出版したヴァージョン。ロンドンの大英博物館 Add.Ms.29803 の、ロッシーニが「1850年6月10日、フィレンツェ」と日付を記した自筆楽譜に基づいている。もう一つの自筆楽譜がシエナで見つかっており、これはもっと短いヴァージョンで「1850年5月20日、フィレンツェ」の日付がある。

楽譜 1

『ジョアキーノ・ロッシーニへのフィレンツェ人たちの尊敬』(1902年フィレンツェ刊)に掲載された自筆楽譜



以上の記述は、〈黙って嘆こう〉には私たちがまだ知らない多数の異稿が存在することを教えてくれる。Gossett(B)はそれを次の6項目で略述している。

Gossett(B):120/1 〈*Mi lagnerò tacendo*〉 (メタステージオ) : 数多くのヴァージョンがアルバムに見出せる。その中の重要なものは次のように列挙される。

Gossett(B):121/1 〈*L'amante discreto* (控えめな恋人)〉 (ソプラノとピアノ) [註: 前記 (a) に該当する]

Gossett(B):122/1 〈*Mi lagnerò tacendo*〉 (ソプラノとピアノ) 1847年以前 [註: 122/2として3種の出典を挙げるが、前記リストのどれに該当するのか不明]

Gossett(B):123/1 〈*Mi lagnerò tacendo*〉 (ソプラノとピアノ) 1833-39年? [註: 123/2は三つの自筆楽譜の所蔵先を記し、1840年にパリの「ガゼット・ミュージカル」から出版されたとする] 【楽譜2】

Gossett(B):124/1 〈*Mi lagnerò tacendo*〉 (ソプラノとピアノ) [註: 前記 (e) に該当する]

Gossett(B):125/1 〈*Mi lagnerò tacendo*〉 (ソプラノとピアノ) [註: 自筆楽譜はスイスの個人コレクション。ファクシミリはヴァンターニッツの書(1955年)に掲載] 【楽譜3】



楽譜 2

『ルヴュ・エ・ガゼット・ミュージカル・ド・パリ』
1840年 No.1の付録に掲載された自筆楽譜
の複製。筆者蔵



楽譜 3

ヴァンターニッツの書に掲載された自筆楽譜
(Emanuel Winternitz: *Musical auto-
graphs, from Monteverdi to Hindemith,*
Volume 2, Princeton University Press,
1955より)

Gossett(A)で〈黙って嘆こう〉をテキストとする多数の自筆異稿の存在が示唆されたにもかかわらず(前記 a~e だけで 25 種!)、詳細はその後の作品目録で明らかにされていない。現在では一定の目録化がなされていると思われるが、公表されていないため分類の基準すら不明である。それでもここまで明らかになった事項から、ロッシーニの創作第 2 期における〈黙って嘆こう〉の意味について、筆者自身の解釈を述べてみよう。

創作の第 2 期における〈黙って嘆こう〉の作曲動機とその方法

ロッシーニの〈黙って嘆こう〉が 1830 年頃に入って集中的に作曲され始めたことは、これまでの記述で確かめられる。《ギョーム・テル》(1829 年)を最後にオペラの筆を折った彼は、すぐにパリのサロン音楽家として引っ張りだことなった。貴婦人たちの館、それがロッシーニの新たな舞台である——「貴婦人たちは当時、人気の高かった音楽家ロッシーニに(彼が無理であれば、ベッリーニかドニゼッティに)、音楽会を催すよう求めた。ロッシーニは 1500 フランの報酬で、一晚中、ピアノを受け持ち、歌手やヴァイオリン奏者の伴奏をした」(D.デザンティ『新しい女』⁸⁾)。これはフランツ・リストと不倫の恋におちたダニエル・ステルン=マリー・ダグー伯爵夫人

の回想録の次の記述に基づく——「私の記憶どおりなら、彼〔ロッシーニ〕はかなり少額の 1500 フランの総額と引き換えに、曲目選びと演奏を引き受けてくれた。〔中略〕偉大なマエストロは夜会の間中、ピアノに座って女性歌手の伴奏をしてくれた」⁹。

人気作曲家を一晩独占して 1500 フラン、それは当時の貴族や富豪にとって「少額」だったかも知れない。だが、ロッシーニにとっては違う。彼は《コリントの包囲》の出版権を 6000 フランでトルプナ社に売っているが、一度の夜会のゲストでその 4 分の 1 を得ることになるのだ。ロッシーニを夜会＝音楽会の主賓とするのが貴婦人にとってステイタスの証であり、彼女たちはそのために金を惜しまなかったのだ。それゆえロッシーニが報酬への礼に音楽の贈り物をしても不思議はない。現存する〈黙って嘆こう〉の自筆楽譜の多くに「〇〇侯爵（もしくは伯爵）夫人に献呈」と書かれているのがその証である。その際、新たなテキストを探して作曲したら大仕事になってしまうが、常にひとつのテキストを記憶に留めて使えば難しいことはない。「同一テキストへの付曲」という一見謎めいた行為も、手軽に歌曲を量産するための手段と考えれば容易に説明が付くのである。

このことは即興的に作曲を求められた際の対処法にも適していて、ロッシーニの自筆異稿にしばしば見られるテキストを一部だけ使った短い〈黙って嘆こう〉は、即席で作曲されたことを示している。さらに、同一旋律に基づく異稿がさまざまな献呈歌曲に見られるということも、手軽な作曲法によって説明できる。ロッシーニは一つの〈黙って嘆こう〉を複製させるのではなく、以前作曲した作品を記憶から呼び覚まして新たに書き下ろすのであって、その際に旋律や伴奏の一部を変え、意図的に手を加えるのである。サロン音楽家として人気のあった 1830 年代半ばから〈黙って嘆こう〉が量産され、前記 a) b) d) の如く一つの歌曲のヴァリエーションが自筆楽譜の形で多数存在するのも、そうした理由によるのである。このような作曲動機や作曲方法は、〈黙って嘆こう〉が他のテキストによる歌曲に比べて総じて完成度が低く、芸術性に乏しい理由をも説明するだろう。

ロッシーニ自身が正式に出版を許した《音楽の夜会》全 12 曲は、それぞれ重要なパトロン貴族や友人の歌手に献呈された作品で、被献呈者の名も初版楽譜に明示されている。つまり、折々に作曲した歌曲の中からロッシーニ自身が厳選し、完成作品として印刷に回したのは明らかで、その点で第 2 期の歌曲群の中でずば抜けて完成度が高く、ヴァラエティに富み、その後の転用や異稿も無いのである。完成された楽曲にもはや手をつけたくないというのがロッシーニの流儀であって、《音楽の夜会》の中に〈黙って嘆こう〉が 1 曲しかないことは、彼にとってこの曲がその時点でベストの作品と考えていたからではなかったか。

これに対し、未出版もしくは海賊出版された〈黙って嘆こう〉はロッシーニが出版を前提とせずに作曲し、自筆楽譜を手放してしまった作品が大半である。それゆえ完成度にばらつきがあり、また複数の異稿や異版が存在するのである。同一旋律で多数の自筆異稿が存在している場合には（前記のように〈控えめな恋人〉に 12 種、〈ボレロ〉に 6 種ある）、そのヴァージョンでの初出を特定し、異稿を年代順に配列することで楽曲の変遷を追うことができ、そこから音楽的に完成された「決定版」を導くことができるだろう。

現代の歌手たちが「同一テキスト」であることを面白がり、リサイタルで〈黙って嘆こう〉を多数取り上げることも少なくない。筆者もこれまで何度となく「知られざる〈黙って嘆こう〉の楽譜はないか？」と尋ねられてきた。しかし、数十曲のヴァージョンのうち音楽的に優れた作品は僅かしかない、ということ演奏者たちは理解すべきである。価値のない〈黙って嘆こう〉を歌うよりも《音楽の夜会》や《老いの過ち》の歌曲を歌う方がはるかに有益で、ロッシーニのこのジャンルでの卓越を世に知らしめることをここで強調しておきたい。

¹ 旧稿では〈*Mi lagnerò tacendo*〉を「何も言わずに私は嘆こう」と訳し、文中で「何も言わずに～」と略記したが、HP 用の改訂版ではより短い小瀬村幸子訳の「黙って嘆こう」を採用した。

² 通例《*Siroe re di Persia*》とされるが、Anna Laura Bellina 編の新版は《*Siroe*》を採用している（*Pietro Metastasio: Drammi per musica I. Il periodo italiano 1724-1730*, a cura di Anna Laura Bellina, Venezia, Marsilio, 2002, 所収）。

³ 作曲者と初演年・都市のみ挙げておく。*は《シロエ》、無印は《ペルシア王シロエ》の題で上演。ヴィンチ（1726 年ヴェネツィア）、ポルタ（1726 年フィレンツェ）、サッロ（1727 年ナポリ）、ポルボラ（1727 年ローマ）、ヴィヴァルディ（1727 年レッジョ・エミリア [改 1738, 1739 年]）、ヘンデル（1728 年ロンドン）、フィオレ（1729 年トリノ）、ピオーニ（1732 年ヴロットツフ*）、ハッセ（1733 年ポーニャ [改 1747/1763 年]）、ラティッラ（1740 年ローマ*）、ペレツ（1740 年ナポリ [改 1752 年]）、G.スカラルラッティ（1742 年フィレンツェ*）、マンナ（1743 年ヴェネツィア）、スカラブリーニ他（1743 年リンツ）、マッソーニ（1746 年ファーノ）、ヴァーゲンザイル（1748 年ウィーン*）、コッキ（1750 年ヴェネツィア*）、コンフォルト（1752 年マドリッド*）、ウッティエーニ（1752 年ハンブルク*）、ガルツピ（1754 年ローマ*）、ランブニャーニ（1755 年ロンドン）、エリケッリ（1758 年ナポリ*）、ピッチンニ（1759 年ナポリ）、ラウパハ（1760 年ペテルブルク）、チェドロニオ（1760 年?）、ポローニ（1764 年ヴェネツィア*）、P.A.グリエルミ（1764 年フィレンツェ）、トツツィ（1766-7 年ブランスヴィック*）、トラエッタ（1767 年ミュンヘン）、フランキ（1770 年ローマ）、ボルギ（1771 年ヴェネツィア*）、サルティ（1779 年トリノ*）、ベルトラーミ（1783 年ヴェローナ）。なお、これ以後はウバルディ（1810 年トリノ）があるのみ。

-
- ⁴ ロッシーニ全集のメタスタジオ原詞引用ではロッシーニ同様「Crudel!」と語尾母音が省略される（全集版 VII/1.,p.XVIII 及び VII/2.,p.XVIII）。しかし、従来のメタスタジオ全集も A.L.Bellina 編の新版も語尾母音があり、オリジナル・テキストとしてはこれが正しいものと思われる。
- ⁵ 《スペインのカンツォネッタ》（1821年）の〈黙って嘆こう〉ヴァージョンは1844年以降の作品。
- ⁶ ゴセットによるロッシーニ作品目録は、1968年に初めて作られた（Luigi Rognoni: *Gioacchino Rossini*, Torino, 1968. 所収）。Gossett(A)は1977年に出版された同目録の改訂版を指す—— *Catalogo delle opere* a cura di Philip Gossett (Luigi Rognoni: *Gioacchino Rossini*, Torino, 1977.2/1981.)。ゴセットは続いて *The New Grove Dictionary of Music & Musicians.*, London, 1980. の項目「Rossini」にロッシーニ作品目録を提供し、同事典のテーマ別抽出版（*The New Grove Masters of Italian Opera [Rossini Donizetti Bellini Verdi Puccini]*, 1983.）を経て、イタリア語新版が1995年にリコルディ社から出版された（*Rossini Donizetti Bellini*, Milano, Ricordi, 1995.）。Gossett(B)はこの最後の版とその分類番号を指す。
- ⁷ 細川フランコ/久榮 対訳・監修『ロッシーニ歌曲集』（カワイ出版、1992年）の〈ニツァ〉と、畑中良輔/細川正直 [細川フランコ] 編集『ロッシーニ声楽作品集』（全音楽譜出版社、1992年）の〈ニーチェ〉。筆者は『ロッシニアーナ』（日本ロッシーニ協会紀要）第17号（2000年10月発行）掲載の初出原稿においてこの二つの楽譜を批判的に検証したが、HP用の新版ではその部分をカットすることにした。詳細は初出原稿をお読みいただきたい。
- ⁸ D.デザンティ『新しい女 19世紀パリ文化界の女王マリー・ダグー伯爵夫人』（持田明子訳、藤原書店、1991年）p.36.
- ⁹ *Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agoult (Daniel Stern)*, I., Mercure de France, Paris, 1990., p.236.